

## 地域のリウマチ者の会に参加者が見出している意味

## — 歩行困難なリウマチ者への面接から —

表 志津子 杉森二三恵\* 佐伯 和子  
塚崎 恵子 長沼 理恵

## 要 旨

本研究は、地域で暮らす歩行困難なリウマチ者たちが、地域のリウマチ者の会に参加することにどのような意味を見出しているのかを明らかにすることを目的とした。対象は会に継続して参加するリウマチ者であり、方法はグランデッドセオリーアプローチを用いた。データ収集は、面接および会への参加観察により行い、面接内容は同意を得てテープに録音し逐語録として用いた。倫理的配慮として参加者には研究の目的、方法、権利、参加の利点とリスク、個人情報保護について説明し、同意を得た。参加者は5名で平均年齢57.4歳(52-61歳)、全員女性であった。参加の意味を現すカテゴリーとして、《毎日頭の中を占めている痛みを忘れられる》、《他の人には理解できない痛みを分かり合える》、《関節が変形し不自由な自分にも、発揮出来る力があると思える》、《引きこもっていた自分が一員となれた会で、みんなと会える楽しみがある》の4つが抽出された。さらに【リウマチの痛みを忘れ、埋もれていた力を発揮できる】という中核カテゴリーが抽出された。リウマチ者の会への参加は、歩行困難な参加者にとって、生活行動の基準となっていた痛みを意識しないで済む貴重な時間であり、自分の価値を再確認できる場となっていることが示唆された。

## KEY WORDS

rheumatoid arthritis, community nursing, walking limitation, self-help group

## はじめに

関節リウマチは、軟骨・骨破壊による疼痛や様々な関節症状により、日常生活への障害をきたす疾患であり、40歳以上の女性に好発する。さらに、症状の進行により歩行能力に障害をきたすと、自由な外出が出来なくなることから、リウマチ患者の生活満足感や健康満足度、疾病満足度、疾病障害感是有意に低下する<sup>1)</sup>。リウマチ患者は、日常生活に障害を抱え生活しているが、生活上の障害をサポートする目的での介護保険サービスは有効に利用されているとはいえず<sup>2,3)</sup>、生活の質向上のためサポートする人や機関を活用することが必要となる。

リウマチ患者がより質の高い生活を送るため、患者の相互交流や情報交換を目的とした活動として、全国にリウマチ友の会や病院が運営する患者会があ

り、そのとりくみや支援についての報告がされている<sup>4,5)</sup>。I県A町では、地域で暮らすリウマチ者たちが生活上の工夫や福祉制度への知識を深め、生活の質を高めることを目的として、町主導のリウマチ者の会(以下会とする)が立ち上げられ、会は町の保健師の支援をうけながら1年が経過した。会の立ち上げ時、参加者からは自主的な活動を意識した言動はなかったが、会を重ねるごとに仲間として理解し合う言動がみられ、希望を語るという会の効果がみられるようになった。

今後の活動がより主体的なものとなるための支援をするには、会の当事者であるリウマチ者たちを理解することが重要であり、参加者たちが会に参加することの価値や重要さなど会どのように捉えているかを明らかにすることが必要である。そこで本研究

は、リウマチ者たちが、会に参加することにどのような意味を見出しているのかを明らかにすることを目的とした。さらに、リウマチ者が会を継続するための課題と地域看護の専門職としての支援のあり方を検討した。

## 方 法

### 1. リウマチ者の会の経緯

平成15年9月に、人口約9,000人のA町に在住するリウマチ者を対象に、町の事業として会を開催するための事前調査が実施された。平成15年11月、事前調査で把握できた9名のリウマチ者のうち、7名が参加し1回目の会が開催され、日ごろの病気についての思いが語られた。平成16年5月、2回目の会は講師を招き、参加者から要望があったリウマチ治療薬についての会が開かれ、参加者と講師の活発な質疑が行われた。

平成16年7月からは、1、2回目の会に継続して参加した5名に保健師が声をかけ、3回目以降の会が1-2ヶ月に1回開かれた。会は参加者により「ひまわり会」と名づけられ、日ごろの病気についての思いが参加者から語られると同時に、会の目的や今後の活動内容が話し合われた。平成16年11月には6回目の会が開かれ、会報を作成して町内のリウマチ者たちに配布し、忘年会を計画するなど自ら活動する姿が見られるようになった。研究者は、会の立ち上げから会の運営を補助する形で参加した。

### 2. 対 象

会の準備時に把握していたA町在住リウマチ者9名のうち、3回目以降の会に参加している5名である。

### 3. データ収集と分析

調査期間は、平成15年9月から平成16年12月である。研究は、質的帰納的研究方法の一つであるグラウンデッドセオリーアプローチ<sup>6・7)</sup>を用いた。面接は平成16年11月から12月に行い、データ収集は、参加者への面接および継続的な会への参加時の観察により行った。面接は、鈴木による調査的面接の技法<sup>8)</sup>を参考にインタビューガイドを作成し、半構成的面接法を用いて研究者が実施した。面接内容は、リウマチとともに暮らす思い、会への思い、他の参加者や町に対する思いについてであった。面接は参加者の希望により自宅で行い、面接時間は一人平均約70分であった。面接内容は、同意を得た後、すべての

参加者の面接をテープに録音し逐語録として用いた。また、研究者らが会での参加者の言動を観察し、会の終了後に観察した参加者の言動について意見交換し、その記録を分析に用いた。分析は、逐語録と参加観察記録を繰り返し読み、研究者の受けた印象を記載し、参加者ごとに参加者の背景や参加観察の状況を意識しながら、意味を読み取れる文章のまとまりごとにオープンコードとした。次に、全参加者のオープンコードから、語られた言葉の意味を考えコードを作成し、意味の類似したものをまとめて最終コードとした。コードの類似と相違を比較しながら、似たような特徴を持つグループに分類し、それらが表す概念を検討し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。そして、カテゴリー全体を表す中核カテゴリーを抽出した。カテゴリーは、カテゴリーの特性を特定するサブカテゴリーと関連付けを行い、さらに文脈の一貫性を確認した。その作業を通して、カテゴリーがおきている状況を具体的に表す参加者の背景を、コードから取り出し、カテゴリーの説明に用いた。

### 4. 信用性の確保

研究者は、会に継続的に参加して参加者との信頼関係を築くとともに、参加者の理解に努めた。研究者が会に参加した経過と参加観察を記載した内容は、解釈に誤りがないことを担当保健師とともに確認した。また、担当保健師および、研究者間で十分な意見交換を行った。分析に用いたデータや資料、分析の過程やその結果が、論文の読み手である第三者に確認できるよう、決定に至る過程を保存し、且つ論文中に記載した。

### 5. 倫理的配慮

対象者には研究の目的、方法、権利、参加の利点とリスク、個人情報保護について説明し、同意を得られた者を参加者とした。同意は文書により得、手指関節変形により同意書記載が困難な場合には、本人の目の前で代筆した。生活圏が限定された参加者であるため、結果の公表の際には個人が特定されないよう、結果に影響しない範囲で表現に修正を加えた。

## 結 果

### 1. 参加者の概要

参加者は5名で、平均年齢57.4歳(52-61歳)、全員女性であった。疾患名は、関節リウマチ4名、

表1 参加者の概要

項目	概 要							
年 齢	50-54 歳	1名,	55-59 歳	2名,	60-64 歳	2名		
性 別	男性	0名,	女性	5名				
家族構成	独居	1名,	夫婦と子	2名,	夫婦と親	2名		
疾患名	関節リウマチ 4名,			悪性関節リウマチ 1名				
病 歴	3-5 年	1名,	6-10 年	1名,	10-20 年	2名,	20 年以上	1名
身体障害者手帳	3 級	2名,	2 級	3名				
要介護認定	未申請	2名,	要支援	1名,	要介護 1	2名		
介護保険利用内容	ホームヘルプ	3名,	通所ケア	1名,	福祉用具	1名		
手術既往	右足関節固定術 1名, 人工股関節置換術 2名, 人工膝関節置換術 2名, 無 1名							
外出手段	自家用車	1名,	バイク	2名,	車椅子 (電動含む) 2名			
障害老人の日常生活自立度 *	J1	1名,	J2	2名,	A1	1名,	B1	1名
破行	有	5名,		無	0名			

\* J1: 公共交通機関を利用して外出する J2: 隣近所へなら外出する A1: 介助により外出し日中はベッドから離れて生活する B1: 屋内での生活はなんらかの介助を要し, 食事・排泄はベッドから離れる

悪性関節リウマチ1名で、発病後3-5年1名、6-10年1名、10-20年2名、20年以上1名であった。身体障害者手帳の申請は5名、介護保険申請は3名であり、要介護認定者はホームヘルプサービスを利用していた。全員に破行があり、外出手段が歩行のみの参加者はおらず、自家用車やバイクを利用、車椅子を利用していた。5名中4名に手術の既往があった(表1)。

## 2. 会への参加に見出している意味

会への参加の意味に関連して、《毎日頭の中を占めている痛みを忘れられる》、《他の人には理解できない痛みを分かり合える》、《関節が変形し不自由な自分にも、発揮出来る力があると思える》、《引きこもっていた自分が一員となれた会で、みんなと会える楽しみがある》の4つのカテゴリーと、カテゴリーに関連する16のサブカテゴリーが抽出された。さらに【リウマチの痛みを忘れ、埋もれていた力を発揮できる】という中核カテゴリーが抽出された(表2)。これらを抽出した過程を以下に述べる。中核カテゴリーは【 】, カテゴリーは《 》, サブカテゴリーを〈 〉, カテゴリーがおきている状況について具体的に表す背景をコード〔 〕で示した。

参加者は、〔通院は負担だけれど治療が最優先〕で、〔副作用がわかっても薬なしには生きられない〕と、関節リウマチと折り合いをつけることが最優先の生活を送っていた。家庭では、〔健常の家族に痛みを理解するのは困難だと思う〕と理解されない痛みを抱えていた。そのような状況で会に参加し、〈いつも気になっている痛みが、会に来ている間は気にならない〉、〈会では体調の悪さを忘れられ

る〉と、痛みを忘れられ、また〈みんなで話していると、自然と笑顔になれる〉ことから、《毎日頭の中を占めている痛みを忘れられる》という意味があった。

リウマチの痛みの理解については、〔この病気の経験がない先生への相談には疑問がある〕、〔症状の軽い人には本当の痛みはわからない〕、〔健常の家族に痛みを理解するのは困難だと思う〕と、医療の専門家にさえ自分たちの痛みへの理解は難しく、理解してもらえないという状況があった。参加者は会のメンバーを、〈同じ病気だからこそ、困っていることが分かり合える〉、〈症状の軽くない仲間だから、本当の痛みが分かり合える〉仲間として捉えていた。また、参加者同士が症状の比較をすることにより情報を得、〈他の人の話を聞いて、自分の現状を落ち着いて見られるようになった〉と自分の気持ちの落ち着きを語っていた。このことから会の参加には、《他の人には理解できない痛みを分かり合える》という意味があった。

参加者は慢性進行性の疾患である関節リウマチ発症により、〔いずれ寝たきりになることを覚悟している〕と、今後の自分を予測し、〔手が曲がり、指が駄目になって家族の役に立たなくなった〕と自分の評価をしていた。しかし、〔家族に迷惑をかけなくても外出できる〕、〔役割を分担すれば自分に出来ることで力になれる〕という体験をしたことから、会でも〔誰からともなく次はこれをしようとする声上がる〕状況であった。参加者は、関節リウマチにより〈あきらめてきた普通の人のつながりが体験できる〉、〈他のメンバーと一緒にだと、自分からすすん

表2 リウマチ者の会に参加者が見出している意味

中核カテゴリー		
【リウマチの痛みを忘れ、埋もれていた力を発揮できる】		
カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリーの状況を具体的に表す背景
《毎日頭の中を占めている痛みを忘れられる》	〈いつも気になっている痛みが、会に来ての間は気にならない〉 〈会では体調の悪さを忘れられる〉 〈みんなで話していると、自然と笑顔になれる〉	〔通院は負担だけれど治療が最優先〕 〔副作用がわかっても薬なしには生きられない〕 〔健常の家族に痛みを理解するのは困難だと思う〕
《他の人には理解できない痛みを分かり合える》	〈同じ病気だからこそ、困っていることが分かり合える〉 〈症状の軽くない仲間だから、本当の痛みが分かり合える〉 〈病気とどんなふうにつき合っているか語り合える〉 〈他の人の話を聞いて、自分の現状を落ち着いて見られるようになった〉	〔この病気の経験がない先生への相談には疑問がある〕 〔症状の軽い人には本当の痛みはわからない〕 〔健常の家族に痛みを理解するのは困難だと思う〕 〔リウマチがこれ以上悪化することに不安がある〕
《関節が変形し不自由な自分にも、発揮出来る力があると思える》	〈手が変形し何も出来なくなったと思っていた自分にも、力が残っていると思える〉 〈あきらめてきた普通の人のつながりが体験できる〉 〈他のメンバーと一緒に、自分からすすんで役割を買って出ることができる〉 〈サポートがあれば、自分たちが中心となって会を継続出来ると思える〉	〔いずれ寝たきりになることを覚悟している〕 〔手が曲がり、指が駄目になって家族の役に立たなくなった〕 〔誰からともなく次はこれをしようと声上がる〕
《引きこもっていた自分が一員となれた会で、みんなと会える楽しみがある》	〈会に行くことを考えると、気分が高揚する〉 〈引きこもっていた自分が、毎月定期的集まりたいと思える場がある〉 〈不自由な足でも、サポートがあれば家族に迷惑をかけずに外出できると思える〉 〈他の人の力を借りてもみんなで外出したいと思える〉 〈人にいえない病気のことを、この人達に言えると思える仲間が出来た〉	〔誰かに頼らないと外出できないので、お願いするには気兼ねがある〕 〔移動の足がないので遠くの会には行けない〕 〔通院先では近況報告ぐらいでゆっくり話が出来ない〕 〔話を聞くと自分も負けられないと思う〕 〔家の中だけにいるとストレスがたまってひどくなる〕

で役割を買って出ることができる」と会の参加による変化を語った。さらに、〈手が変形し何も出来なくなったと思っていた自分にも、力が残っていると思える〉、〈サポートがあれば、自分たちが中心となって会を継続出来ると思える〉と会の持ち方についても語り、《関節が変形し不自由な自分にも、発揮出来る力があると思える》という意味があった。

また、本研究参加者は移動能力に障害があり、〔誰かに頼らないと外出できないので、お願いするには気兼ねがある〕と、自由に外出できない状況であり、リウマチ者との交流は、〔通院先では近況報告ぐらいでゆっくり話が出来ない〕と、他のリウマチ者と語る時間を持つことが困難な状況にあった。会については〔移動の足がないので遠くの会には行

けない〕、〔できることをあせらずゆっくりやりたい〕という状況であった。参加者は〈会に行くことを考えると、気分が高揚する〉、〈引きこもっていた自分が、毎月定期的集まりたいと思える〉と会への思いを語り、〈人にいえない病気のことを、この人達になら言えると思える仲間が出来た〉、〈他の人の力を借りてもみんなで外出したいと思える〉と仲間としての思いも語り、《引きこもっていた自分が一員となれた会で、みんなと会える楽しみがある》という意味があった。

以上から、参加者は会に参加することにより、【リウマチの痛みを忘れ、埋もれていた力を発揮できる】という意味を見出していた。

## 考 察

### 1. 日常的な痛みがあるリウマチ者にとっての会の意味

慢性進行性の疾患である関節リウマチ機能障害度分類 Class 1, 2 の軽症群では、罹病期間が長いほど障害感が大きく、歩行能や痛みは健康感や健康満足感と正の相関がある<sup>9)</sup>といわれる。今回の面接場面では、参加者全員が面接者の問いに答えるより先に、自分の関節リウマチの経過やそれがいかにつらいことであったかを語り、健康感が低下していることが推察された。痛みについては、多久島らが、リウマチ患者は日常生活を送る上で痛みや体の不自由さ、疲れやすさを訴え、特に痛みは60%が困っている<sup>10)</sup>と報告し、黒田らは、リウマチ患者は疼痛が長期化するほど抑うつ傾向が強くなり、疼痛の緩和を計ることはリウマチ患者の精神的安定につながる重要な援助事項である<sup>11)</sup>と述べていることから、参加者にとって日々の痛みは、生活の中の何よりも優先し、生活のあり方に影響していると考えられた。また、会に参加する前の参加者の気持ちは、痛みにより、拘縮変形している関節の状態のように硬さがあったのではないかと考えられた。このような参加者が会に参加することにより、〈みんなで話していると、自然と笑顔になれる〉と、痛みを気にせずリラックスした時間を過ごすことが出来、《毎日頭の中を占めている痛みを忘れられる》という意味があった。治療をする病院という場ではなく、生活する地域のなかに同じリウマチ者たちが集まる場があるからこそ、リウマチの痛みが忘れられ精神的な安定が得られていると推測され、このような場を作ることは地域の看護職における重要なケアのひとつであると考えられた。

### 2. セルフヘルプグループとしての会の意味

本研究の参加者のように、何らかの問題・課題を抱えている本人や家族自身が仲間同士支えあうグループとして、地域には様々なセルフヘルプグループ(以下 SHG)がある。SHG は参加の自発性と参加者が問題を持った本人であること<sup>14)</sup>と定義されている。SHG には、エンパワメント(力を獲得していくこと)という機能があり、これは、人間が自らの問題を解決し自らの力をコントロールする力を得、生活に意味を見出し、力を得ていくことである<sup>15)・16)</sup>。参加者においても、会の参加を通して、これまで〈ひきこもっていた自分が、定期的集まりたいと思える〉、〈他の力を借りてでもみんなで外出したい

と思える〉と、会に参加し、仲間を通して力を得ることにより、自らの力を活動に生かそうとする変化が現れていた。また、会には SHG の機能で最も重要であるといわれる自尊感情の回復と力づけ<sup>17)</sup>が存在しており、保健師主導で開始された会ではあったが、SHG の機能を十分に果たしていると考えられた。さらに、会の参加は参加者にとって、仲間との交流により痛みを忘れ、生活行動の基準となっていたリウマチを意識しないですむ貴重な時間となっていると考えられた。この結果が得られたのは、会を支援する保健師が、常に参加者が主体であるという姿勢で、参加者の側面的な支援を続けてきたことが影響していると考えられた。

また、対象地域は人口規模が小さく、近所付き合いを求められる古い町であり、〔家族の役に立たなくなった〕自分を隠すように家の中に引きこもる者もいた。仕事を持たない中高年女性である参加者にとって、家事のための買い物に自由に歩いて出かけることが出来ないこと、手指関節の炎症により家事遂行が困難となることは、母親として、妻として一般的に考えられている家族からの役割期待<sup>12)</sup>に応えられないつらい思いを抱えてきたと推測される。斉藤は、障害者は周囲から期待された障害者像を演じ続けることは、障害者の無力化を生み出す<sup>13)</sup>と述べており、参加者も徐々に進行する症状により、生活機能を奪われ自分を無力と感ずるようになっていたのではないかと考えられる。しかし参加者は、会に参加することにより日々とらわれているリウマチの痛みを忘れるという体験をした。この体験は、〈自分からすすんで役割をかってでることが出来る〉というこれまで忘れていた自分の力を再認識させ、参加者を無力感から解放させたのではないかと考えられた。

### 3. 歩行困難な参加者にとっての会の意味

発症から10年以上経過し、下肢の関節手術を経験した参加者は、〔いずれ寝たきりになることを覚悟している〕と、慢性進行性である関節リウマチを捉えていた。外出についても〔誰かに頼らないと外出できないので、気兼ねがある〕など、心理的な不自由さを語っていた。また、外出手段が体調、天候や痛みにより左右されるため、いつでも容易に外出できる状態ではなく、地域から孤立傾向にあると推測された。しかし、《引きこもっていた自分が一員となれた会で、みんなと会える楽しみがある》という意味があったように、自分たちの会と思える会に帰属し、

そこで〈あきらめてきた普通の人のつながりが体験できる〉ことにより、リウマチ者たちの中での小さな社会を作りだし、一人一人の生活を豊かなものにしていくと考えられた。歩行困難があり外出が不自由であっても、リウマチ者たちは介護保険サービスを利用せず、最大限自力で行うという傾向があるため、地域の中でニーズのある対象として取り上げられにくい。地域看護の専門職は、リウマチ者たちの外出や自分たちの力を実感できるような支援をすることにも目を向け、地域での豊かな暮らしにつながる必要があると考える。

参加者は、自分たちの会と思える会を持つ過程の中で、〈サポートがあれば自分たちが中心になって会が継続出来ると思える〉と継続を前向きに捉えていた。しかし、今後の症状の悪化などにより、今以上に参加のための支援が必要となることが予測される。特に外出支援は、本研究の参加者のように、地域で家にとじこもりがちなりウマチ者にとっては欠かせないと考える。障害のあるグループの活動には、行政のかかわり以上にボランティアの力が大きいこと<sup>18)</sup>は周知であり、会の継続には、リウマチ者たちが会に見出している意味を理解し、会を支援することのできる身近な人材を地域の重要な資源として、確保することも必要であると考え。加えて、会の規模を大きくすることは、歩行困難のある参加者にとって参加の機会を減らすことになる可能性があり、対象に応じた規模を考えた活動支援をしていく必要性が示唆された。

本研究の限界は、参加者が歩行困難な中高年女性に限定されていること、地域が限定されていることである。そのため、本研究で得られた結果は、地域で暮らすリウマチ者すべてにあてはまるものとは言えない。しかし、このような状況にあるリウマチ者たちが会に参加する意味を示すことにより、同様に地域で暮らす人たちの生活の質の向上に役立つ示唆が得られたと考える。今後、症状や地域に多様性をもたせて調査することにより、地域での会のあり方をより検討することができると考える。

最後に、本研究に快く協力していただいたひまわり会の皆様に深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) 佐藤元 他：慢性関節リウマチ患者の QOL と患者の主観的健康感・生活満足感との関係について、日本公衆衛生学会誌，9：743-753，1995.
- 2) 三橋尚志，万波健二：京都府下におけるリウマチと介護保険。臨床リウマチ，14：246-252，2002.
- 3) 荒巻さと美，前田真治：関節リウマチ患者における介護保険の利用状況と QOL 評価。北里理学療法学，6：21-24，2003.
- 4) 西野 学：当院におけるリウマチ患者教育の実際。日本 RA のリハビリ研究会誌，17：65-67，2003.
- 5) 宮原恵子，原田咲千子：地域におけるリウマチ患者支援—保健相談所の事業から。クリニカルプラクティス，23：826-827，2004.
- 6) Strauss, A.L. & Corbin, J., 南裕子 監訳：質的研究の基礎 グラウンデッドセオリーの技法と手順。医学書院，1999.
- 7) Strauss, A.L. & Corbin, J., 操 華子，森 崇 訳：質的研究の基礎 グラウンデッドセオリー開発の技法と手順。第2版，医学書院，2004.
- 8) 鈴木淳子：調査的面接の技法。初版，63-77，ナカニシヤ出版，2003.
- 9) 佐藤元 他：慢性関節リウマチ患者の QOL と患者の主観的健康感・生活満足感との関係について、日本公衆衛生学会誌，9：743-753，1995.
- 10) 多久島寛孝 他：高齢慢性関節リウマチ患者の在宅における生活状況—アンケートによる実態調査—。老年看護学，5：173-180，2000.
- 11) 黒田広生 他：心身医学から見た RA 患者の特徴について。Clin Rheumatol，9：136-141，1997.
- 12) 伊藤智佳子：障害を持つ人たちのエンパワーメント。初版，50-54，一橋出版株式会社，2002.
- 13) 久保紘償，石川到覚：セルフヘルプ・グループの理論と展開。10-11，中央法規，1998.
- 14) 岡知史：セルフヘルプグループの援助特性について。上智大学社会福祉研究平成7年度報，3-21，1994.
- 15) Borkman, T. : Experiential knowledge : a new concept for the analysis of self-help groups. Social service review., 50 : 445-456, 1976.
- 16) 久保紘償，石川到覚：セルフヘルプ・グループの理論と展開。48-49，中央法規，1998.
- 17) Katz, A.H., 久保紘償監訳：セルフヘルプ・グループ。42-44，岩崎学術出版社，1997.
- 18) 足原美世子，彦根倫子：難病自主グループ育成の経過。日本難病看護学会誌，3：82-84，1999.

## **The significance of participating in community rheumatic group or rheumatism sufferers with walking limitation**

Shizuko Omote, Humie Sugimori, Kazuko Saeki  
Keiko Tsukasaki, Rie Naganuma

### ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the significance of participating in community rheumatic groups for rheumatism sufferers with walking limitations. The subjects were rheumatism sufferers who had continued participation in a community rheumatic group. The method of the study used was the grounded theory approach ; and the data were gathered from observation of participants in community rheumatic group meetings and semi-structured interviews. The interview was recorded on tape after informed consent was obtained from the participant. Ethical considerations involved explaining to the participant about the objective, method of the study, the advantages and disadvantages, and the protection of personal information. There were five participants, with a mean age 57.4 (52-61 years old), and all were female. Four categories were found to be significant for participation in the rheumatic group, and they are listed as follows : 'I am able to forget the daily pain that fills my head', 'We can share and understand our pain that others cannot understand', 'Even if my joints change shape and I have walking limitations, I feel that I still have some strength to give', 'I look forward to seeing the other participants in the group of which I, usually stuck at home, have been able to become a member'. In addition, 'I can forget my rheumatic pain and exert some hidden strength' was found to be a core category. Our study has suggested that participation in Rheumatic community groups is, for participants with walking limitations, valuable time where they forget the daily pain that has become part of their lives, and is seen to be a place where their self-worth can be re-validated.